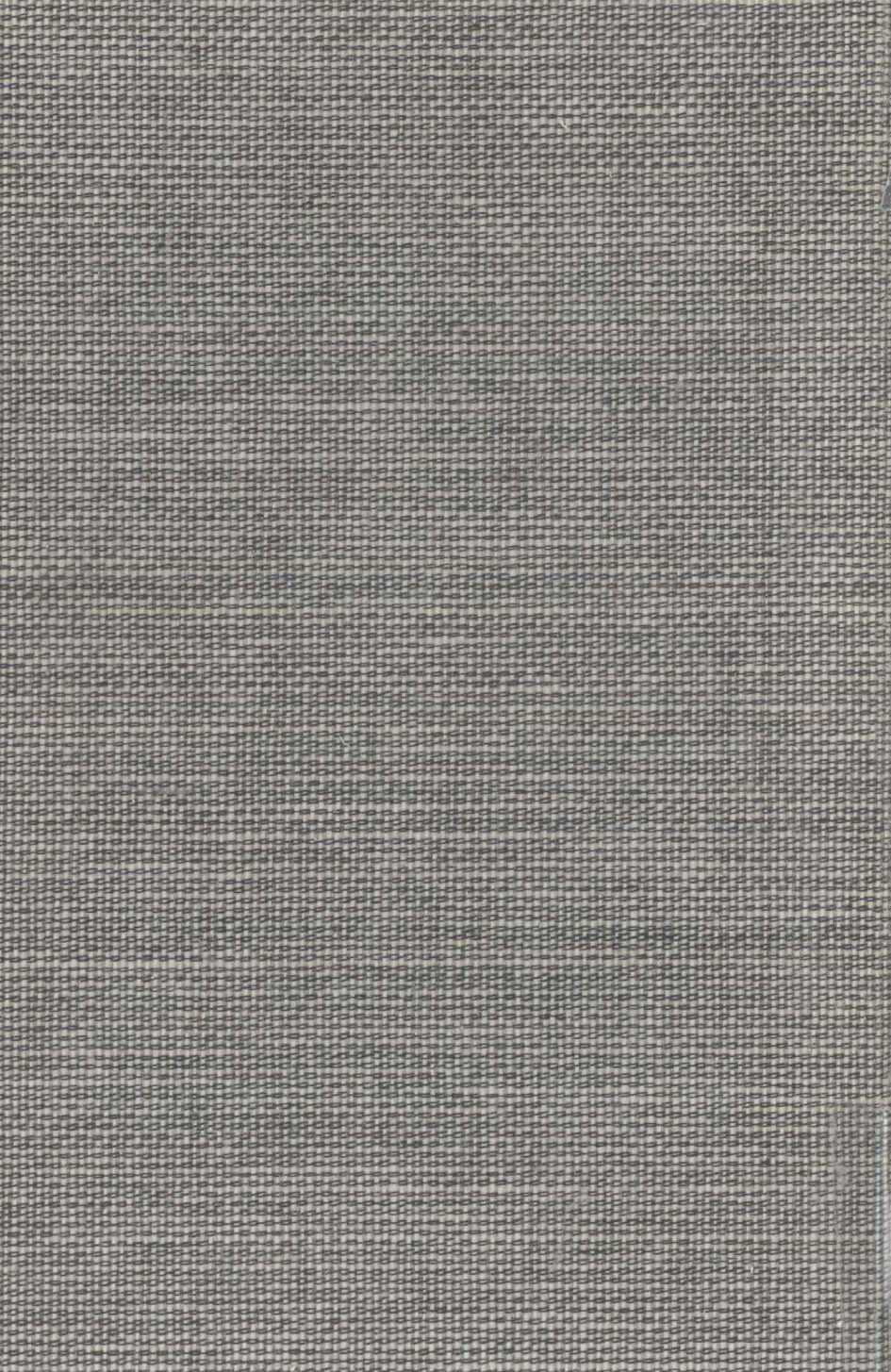




堯
高見順
日記

才五卷

勁草書房

続 高 見 順 日 記 第五卷

1976 年 3 月 17 日 第 1 刷発行

著 者 高 見 順
発 行 者 井 村 寿 二

発行所 東京都文京区 振替東京5-175253 株式 勁草書房
後楽 2-23-15 電話(03)814-6861 会社

落丁・乱丁本はお取りかえします。

三陽社印刷・複製本

© 1976 Jun Takami

Printed in Japan

* 定価は外函に表示してあります。

0395-881400-1836

続高見順日記 第五卷 目次

死生の十字路 三

昭和四十年一月	5
昭和四十年二月	135
昭和四十年三月	193
昭和四十年四月	281

死
生
の
十
分
の
一
三

昭和四十年

一月一日

快晴。

ベッド生活、これで一年。

昭和四十年——私が生れたのは明治四十年。

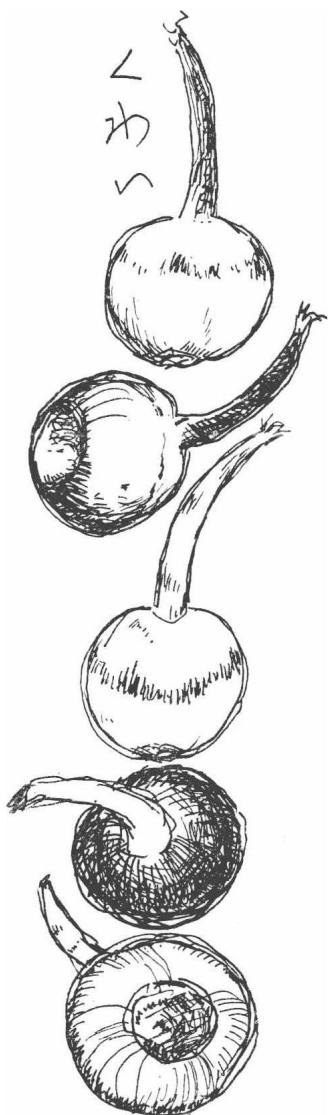
折詰のおせち料理が配られる。

下痢のため、ぐたり。昨日泊ったミヨさんがお雑煮をつくる。小さなおモチひと切れ。食欲なし。

九時半 点滴注射。うとうと寝る。二時まで。

カンちゃん来る。川端さんの贈り物、辻留の折詰持参。

スケッチ。三時 おかゆ。



『自然』二月号に鎮目恭夫氏が生物学者ホールデンの死のことを書いている。と言っても、私はホールデンのことは何も知らぬ。

彼は一九三七年、スペイン内乱の人民側国際戦義勇軍に参加した。一九四二年、イギリス共産党機関紙『デーリー・ワーク』編集長に就任した。一九四九年、共産党難党、一九五七年、英帝国と訣別して、インド共和国へ帰化。

まことに興味ある人物である。『自然』の一九五八年七月号の鎮目氏「ホールデンとバナール」という文章にホールデン紹介があるらしいが、こうして寝たままではしらべるわけに参らぬ。

J・B・S・ホールデン氏はその死去数日前に、博士の友人だった木村資生博士や増山元三郎博士に、シカゴ大学の“Perspectives in Biology and Medicine”（雑誌）に掲載した自分の論文“A defence of beanbag genetics”の抜き刷りを送ってきた。それに「ガンも奇妙なもの」（Cancer's a funny thing）という詩が添えてあったそうで、鎮目氏はそれを次のように訳して『自然』にのせている。鎮目氏の訳にケチをつけるわけではないが、同じガン患者としては原詩をやはり見たいものである。



J. B. S. ホールデン

Vicky 画

(註11六十八行の詩の
全訳の切り抜き挿入)

「従容ということについて」百三に左のごとき言葉があったと気がつく。「弥陀は我をたのんで念仏申すものは極楽国に往生させると誓つて下さったが、三昧発得させるとか、臨終を取り乱さないようにしてやるとかというようなことを請け合つて下さつては居らぬ。そればかりではない。そういう喜び方、三昧発得して瑠璃地を見たとか、従容として死ぬるとかいふような喜びは、それは喜ばし

CANCER'S A FUNNY THING*

ああ私にホームーの声があったなら／直腸ガンを歌うために、／実際、それは、トロイの攻略のとき殺されたより／よほど多くの奴を殺すのだ。／だが、現代の外科手術のおかげで／それは人を殺すまえに除去できるのだ／科学的根拠によれば／20人のうち19人までは、／私は血便に気づいた／(ほんのちょっぴりではあったが)、／そこでタラハッセからボンベイへの帰途に／ある医者のもとをたずねた／私の腸の末端をみてもらうため、／私が悪性腫瘍にかかったという／疑いに結着をつけるために、／彼らは BaSO₄ [造影剤] を注入した／もうがまんできないほどまで、／そして、十分な量が注入されると／医者は私の大腸を撮影した。／疑問に結着をつけるために、／医者はつぎに腸組織を少しかきとった。／(そのまえに誰か親切な人が／私をベントナール [麻酔剤] で失神させた。／その手際はすぐ手速く／私に痛みを感じさせなかった。) 顕微鏡が答えてくれた／私はりっぱなガンだった。／そこで私は手術室へ運ばれ／いくつかの孔が私のからだにあげられた／一つは私の会陰にである／そこは感じはあるが自分にはみえない。／もう一つの孔は私を kipper (産卵期の雄鮭) のようにした／いや、むしろ Jack the Ripper (痴漢ジャック) の餌食になった女たちのようにだ。／この切開手術によって／ガン細胞が集くっているおそ

れのある／結腸とリンパ節と一緒に／腫瘍が除去されたにちがいない。／第3のずつと小さな孔は、／肛門のかわりのものである：／今私は顔の二つある Janus (イアヌス) に似ている／それは自分の anus (肛門) を見られる唯一の神である。／私は証言したい、偽証罪のおそれなしに、／それはできばしした手術だった。／直腸を失ったのは痛手だが、／ひじょうにみごとな人工肛門ができた。／私はできるだけ速かに／それにきちんと時間表を守らせた。／

こんなわけだから諸君は痛みがひどくなるまで／医者に平衡させるのを引きのばすな；／もし医者が「ガン」だといったら／すぐにそれを切除させないなら諸君はばかだ、／なぜなら、おくれれば必ず拡大し、／転移するおそれもある。／私が夢つちまう前の最後のことはば／「ガンもちょっと楽しめる」だ。／看護婦さんたちやナイ・ベヴァン氏 [前の労働党内閣の保険相] のおかげで／NHS [英国国民健康保険局] はまったく天国だ／もし人がガンに直面しても／十分なユーモアを失わないならばだ。／私はガンがよく人を殺すことは承知だが／自動車や睡眠薬だってそうなのだ；／ガンは人を油汗のほど苦しめるが、／歯痛や借金だってそうすることもある。／ちょっとばかりの笑いが／しばしば治療を加速するものだ。／だからわれわれ患者たちは分を尽そうではないか／医者がわれわれを治してくれるのを助けるために。

(49行め)

* これはオーデン (W.H. Auden) の「Miss Gee と彼女の肉棒について」の詩からの引用句だ、という脚註がついている。オーデンはホールデンと同じくスウェーデンの人民戦線に参加し、その後ホールデンとちがいでアメリカに帰化した詩人である。ホールデンのこの詩は68行で2行ずつ全34対が脚韻をふんでいる。そのうちの1対には、「theatre」と「better」とはアメリカでは語をふまないが、イギリスでは語をふむという脚註までついている。

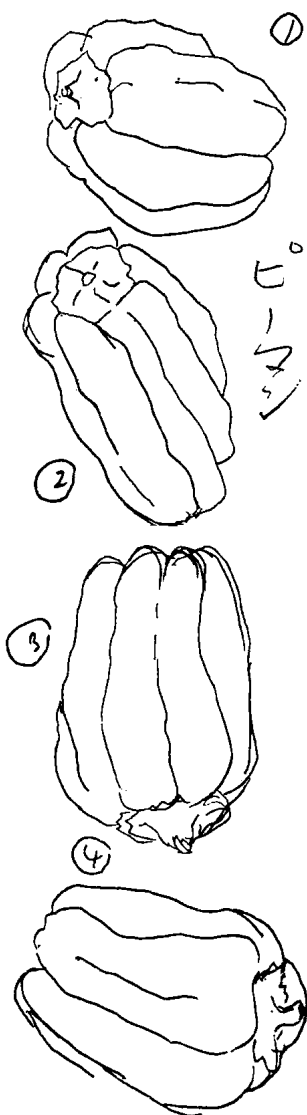
** 著者の脚註によれば、これは19世紀にロンドンで数人の結婚の局勢をとった殺人犯で、結局、捕らなかつたが、その手際の悪さのため外科医ではないかといわれたという。

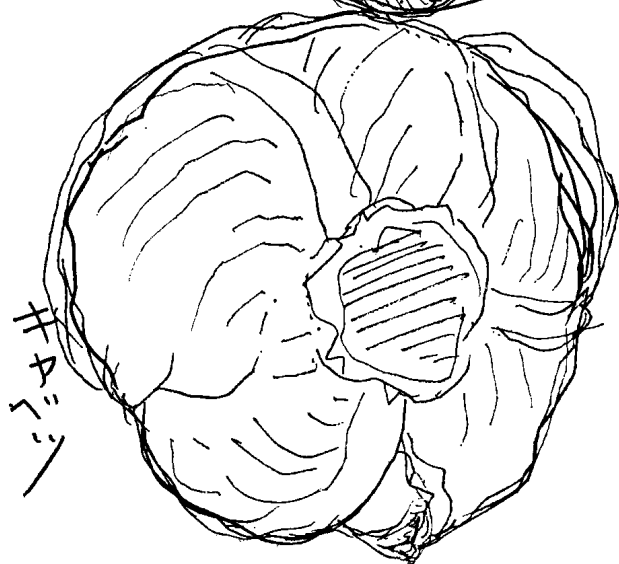
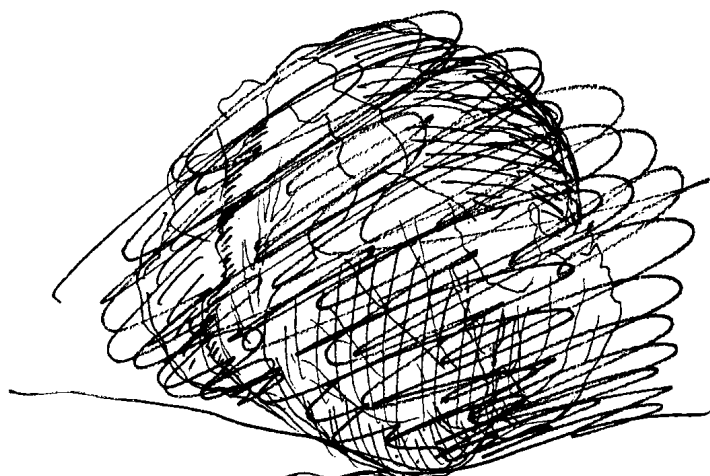
*** インドには余分な顔をつつまでもつ神がいくつかあるが、自分はヒンズー教の信者ではないから、という脚註がついている。イアヌスはローマの神で、物の神格を司り、その神殿には東門と西門があり、平時には閉ざされていて、戦時には開かれたという。

いには相違ないが、浄土宗の信心のよろこびではなく、別のよろこびである。信心のよろこびは何処までも凡夫正機であつて、かくの如き我等をも救つて下さるといふ感謝のよろこびでなくてはならぬ」。これはしかし、臨終は取り乱した方がいい、従容として死んだりしない方がいい、その方がむしろ凡夫正機で救われるということではない。悪人こそ救われるということの卑俗な解釈の間違いと同じである。

ミヨさん、千葉大病院の芳子さんとこへ。「辻留」の料理のおすそわけ。

小野さん来る。「なだ万」のすっぱん汁を持ってきてくれる。モチを入れて食べる。茶碗三ばい食べたが、不思議に腹痛なし。





今月の献立表が来た。室代を入れて一日五百円。食費だけとすると、いくらか。とにかく、安く、心のこもった献立である。(註Ⅱ一月一日から二十日迄の献立表二枚挿入——省略。)

夜 やはり『正宗白鳥』を読む。十一時近く 腹が減り、辻留の特製カマボコ等を食べたが、腹痛なし。今日は便通なし。

ベッドの足もとの台(註Ⅱ自由に移動のきく、ベッド専用の机のこと)の上においてあったポータブルテ



レビ（註Ⅱ第一回目の手術のあと、新潮社が見舞いに持ってきてくれたもの）を、足をのばした拍子に下に落してしまった。そのため、テレビが音を出さなくなった。

胸部の穴が小さくなり（今度の手術後、流動食のため、ものが洩れないので肉が盛り上った）もとのように絶えずジクジク濡れていて気持ちが悪いということがなくなり、たすかる。

一月二日

白鳥の死んだ昭和三十七年（十月）の四月、「女流文学者賞」の記念講演会で、彼は「文学生活の六十年」という講演をした。そのなかで白鳥は「自分で偉そうな考えを持たないで、そこらの凡人と同じような身になったところに、ほんとうの天国の光がくるんじゃないか、ということを感じることがあるんです」と言っている。

これは法然の「此ほかにおくふかき事を存せば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし」を思わせる。二尊とは釈迦と弥陀だ。一切を放下して凡夫になることによって救われる。

「念仏を信ぜん人はたとひ一代の法をよくく学すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同して智者のふるまひをせずしてただ一向に念仏すべし」。この法然の言葉を、晩年の白鳥の言葉は思わせる。キリスト教も仏教も同じだ。親鸞も言っている。「経釈を読み学せざるともがら、往生不定のよしのこと、この条すこぶる不足言の義といひつべし。他力真実のむねをあかせるもろくの聖教は、本願を信じ念仏をまうさば仏になる、そのほか、なにの学問かは往生の要なるべき」。これ

は『歎異抄』の言葉だが、「故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにいる塵ばかりもつくる罪の、宿業にあらずということなしとしるべしとさふらひき」とあるは、かのキリスト教で、神の意志でなければスズメ一羽も地に落ちることはないというのと同じだ。

真宗とキリスト教とが似ているだけではない。禅宗第三祖の「信心銘」に、「真を求むることを要せず、たゞ須らく見をやむべし」とある。これとて同じである。見とは邪見、智識の邪見である。学者の見も、真如に関するかぎり邪見である。有限智で迷っているから迷見から離れられぬ。禅宗なりに、凡夫のはからいを捨てよということだ。

大岩氏は書いている。「白鳥は既述のように郷里の篤信のクリスチャン武ようさんのことをたびたび追想し、憧憬している。例えば『爾後数十年間に得た私の書物の上の知識も、ヨブ記の謎を解くことが出来ないが、さういふ煩はしい疑問に多くの悩みを浪費しないで、平和な心をもつて死の扉を開けて行つたN氏の単純な信仰が羨ましい』（『影』）と、大磯転居直後に感想をのべている。勿論引用の講演の感想はこの素朴な、凡人武ようさんを心に描きながら述べたものであろう」。

こうして白鳥は「心の平和」をもとめ、もとめる「心の平和」の自分に来ないことをなげいているが、いつかは来ると信じている。いつ来るかは分らない。来ないかもしれないと言っているが、「心の平和」をもとめていることは、やがてきつと、彼の心に訪れてくることの前ぶれである。

クリスチャンとして死んだことは、すなわち「心の平和」の到来を証明するものである。

「僕は自分のそういうふうな幸福、なんでもないような幸福が得られないということを一途に頭